現在意識は検閲官

絵からみた心の判断

（十）

児童の画を見てその子の心の状態を判断するのは西洋のチゼツクなどが研究を始め、アルシユーラが幼稚園児について研究したものが日本にも紹介され、浅見氏、久保氏などが日本では情熱を傾けているのであるが、児童心理と精神分析的な判断力が必要であると思う。人間の心には現在意識（上部意識）と潜在意識（下部意識）とがあつて潜在意識の中には他人に話してはどうも困るようなことやはづかしいことなどもたくさんかくれていて、現在意識が検閲官のような役目をして、他人の前に表現してよいことやうそをついたりゴマ化すことを決定したり、あるときは現在意識の隙間にポツカリと潜在意識が飛び出してきて、ハツとするようなことを云つたりしたりすることもある。

夢と共通する

夢にはそれが種々の形で表われると云われているが、絵にはある点は夢と共通したような形をとつて現われたり、ある点はいつも避けになつて描いている観念的な描き方になつたり、ある点は自分の隣りで描いている子供のマネをしたり、ある点は指導者の気に入るように描いたり、ある点は眼に見えた通りに描いてみようとしたり、といつたものがいろいろ組み合わせられて現われるわけである。

大牟田はや馬北桜の横山先生の研究物の中に次のような絵がある四角の線の中に自分を描いて、マルをたくさん描いているが、これはどこかにしまつてあるリンゴをとりたいことを表徴しているのである。四角の横に木が描いてあつて、その枝に鍵がぶらさげてあるこれはリンゴの入つてる所には鍵がかけてあることを表徴してあるのであつて、また黄色の蝶が一匹飛んでいるのであるが、これはお母さんが鍵をかけてどこかへ出かけていつたことを表徴しているのか、またはお母さんが帰つてくれればいいがという心を表徴しているのである。

しかし、その子はマルはリンゴであることまではいつたが、あとはニヤニヤ笑つていたとその研究物には記録してある。

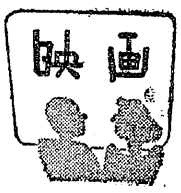
児童画の秘密

子供も三年や四年生ごろになると、現在意識の検閲官がリンゴをとりたいのだとハツキリいわせないようになる。これが満三・四才ごろの子になると、ハツキリいいながら塗りたくりまわすことがある。

私の所に来る子が走る線の上に自分が乗つてムチを高く上げている絵を描いたことがあるが、線は母を表徴するというからこの子はお母さんをムチでたたいて、思うままに乗りまわしたいと心に願望しているのであろう。

しかし、緑の森と黒い道が塗つてある。黒と緑は反目とか虐待などといわれるのだから、お母さんが下の弟妹を可愛がつて、自分を叱るのでお母さんを憎んでいることがある。五年・六年生にもなるといわないからわからないが、児童画の秘密を研究していると、そんなふうな判断が私の心に頭いてくるのである。

（家永勝子・蒲＝雑者は教育研究所嘱託・土曜会）



人間性ふみにじる武士の掟

「夜の鼓」

【かいせつ】徳川の中期、江戸封建政治が行われていたころ参勤交代というのがあつた。大名（藩主）が一年おきに家来ともども江戸の幕府につかえなければならない制度である。

そのために必要な多額な経費は百姓や町民の負担になるのだから、百姓や町民は苦しい生活にあえぎ下級武士もまたそのあおりで楽でない暮しをしている。それだけではない。愛する妻や子と一年もの長い間別れて暮さなければならない。悲劇がつくられるしくみの社会の中に人間が生きることをよぎなくされているわけだ。

下級武士の小倉彦九郎が愛する妻を斬り殺す悲劇はまさにそれだつた。

近松門左衛門作「堀川波の鼓」を原作とする今井正監督の「夜の鼓」は、むなしい封建社会のしくみと非人間的なサムライの掟を現代にいかして、なかなかの力作だ。

【ものがたり】宝永二年、松平右衛門督吉泰は、九百二十七人の供揃いを従えて、国許の鳥取へ向つた。参勤交替で江戸にとどまること一年二カ月、九百余人の心はみんな故郷にとんでいる。日本海が光つて輝き、その故郷も目の前に見えて、みんなの顔は明るい。

小倉彦九郎（三国連太郎）もその中の一人だ。彼には若くて美しい妻お種（有馬稲子）が帰りを待つていた。

やがて一家は明るい笑い声につつまれた。

だが、帰つてきてしばらくたつと彦九郎は何だか分らないがまわりの様子がおかしいのに気がつく。人の噂は容赦なくひそひそとささやかれて一つの大きな声になり、お種が殿様おかかえの鼓師源右衛門（森雅之）と密通した動かぬ証拠を描きだしてしまう。

彦九郎はお種を愛し、信じていたがお種の密通が事実だつたことを知る。しかし、そこに追いこまれたお種の事情も明らかになつて、彦九郎は許そうとするのだが、まわりの者は許さない。

愛する妻を斬り殺すのがサムライの掟である。そしてものものしいいでたちで鼓師をも妻仇討ちをする。

封建時代のふみにじられた人間性へのいきどおりと、かなしみを見事に描いている。【大天地で】

写真は「夜の鼓」の一カット、左三国連太郎右有馬稲子

囲碁教室 (53)

秀策流の布石 7

基本図（二）、黒7のコスミの次に白が右辺を手抜きすると黒いの三間バサミがヒラキを兼ねて絶好となり、先端の効果を益々はつきりさせることになります。

そこで白としては、黒からのハサミを防ぐのが最大の急務となるのです。その手段は

(1)、8、い、ろの何れかのヒラキ

(2)、9の大斜（タイシヤ）ガケは二間バサミ

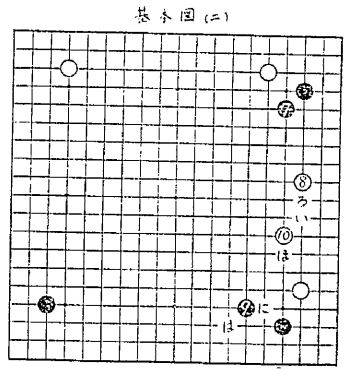
等です。(2)は右下隅を忙しくして黒がいにハサむ余裕を与えないとか、右下の応援の具合で白の石がいの辺りに行くようにするとか、或は右下を黒いのハサミが大して効果がないような形に持つていくというような意図で打たれます。

白8、い、ろは白の右辺のヒラキであると同時に、黒からの攻めを防ぎ黒のヒラキを妨げた手段です。又白8と広くヒラくか、い又はろと、狭くヒラくかが、この後の碁の様相を違つたものにします。

白8と一杯にヒラくと、次に黒9又はにの守りが省けませんこれを怠ると白にとカケられて白の右辺の模様が大きくなつて白8が働いてくるからです。

黒9は白のカケを防ぐと共にいのきびしい打込みを狙つているので、白も10と守ることになります。黒9でになら白はほに打つことは第26回に述べました

橋口 初義
堀 敬一



「渡瀬工場の看護婦さん」

〝ウーウン――〟と八時のサイレンが工場の山にまで響き渡ると課長をはじめ一同思い思いに広場に出てラジオ体操をする。その時とくに目立つて見えるのは、手当所の前で年の頃なら十七、八才の小柄な可愛い一女性が、真面目に体操しているのである。ちよつと長いリボンが春風に蝶々の様に見えて愛らしい。その人こそ半年前に手当所に来た看護婦さんである僕は何時もその人に「院長先生」という。最初はにかむ顔をしていたが、今ではどうしたことか慣ましている。非常に掃除が好きなのか、室内は何時もきれいにしている。先般、課長が「手当所は立派に掃除が出来て気持がいいね」と賞めたそうだ。それからというものはとくに心うきうきさせながら一日に三、四回は掃除をしている様子。娯楽としてはピンポンが好きで、昼休は職場の者と大きな声を出して笑いながらやつている。近頃はちよつと熱がはいつてきたのか、笑い声も減つて汗だくだくでいる。気持のよいときは美しい声で皆の前でも平気で歌を唄う。実に無邪気だ。職場の者の手当も快くするし、すつかり渡瀬工場の人気者になつてしまつた可愛い院長先生である

「一輪の花」

ふと手当所の扉を押せば
窓際に一輪の花が咲いていた
何と美しい花であろう
私は思はず花の香りを味わつた
ほろ甘い云い知れぬ香りが深うた
知らず知らずに唇は花弁に……
機械の音と共に働く私は
清掃した静かなる手当所で
美しく清らかな一輪の花を
瞬もせずいつまでもいつまでも
見つめていた

（渡瀬工場　一組合員）

こどもページ

くまときつね

＝日本昔ばなし＝

ある山奥にきつねとくまがすんでいた。きつねは、くまに「畑をつくつて、よいものをつくろうと思うんだが、どうだい」と、そうだんをもちかけた。

くまは土をほりおこし、きつねは里にたねをとりにいくことになつた。たねをまきおわつたとき、きつねは「くまどん、もうじき大きくなるが、あとでけんかになるといけないから、どつちをとるかきめておこう。わしは土から下のものをもらうよ」といつた。

くまはしかたがないので、土から上のものをとることにした。

しばらくすると、青々と芽をふいてたいそう大きくなつた。やくそくどおり、くまは青葉をとりきつねは大根をとつた。くまはその日うまいなあといつてたべたが、一日たつとしおれてまずくなつたので、きをくさらしてきつねのあなをのぞきにでかけた。あな一ぱいに大根をおいてうまそうに食べていたきつねは「おまえのはばつばだから、二日もたつたら食えんのはあたりまえだア」といつた。くまはだまされたのを知り、おこつてかえつた。

しばらくたつときつねは、またくまのところえいき「もう一ぺんなにかつくろう」ともちかけた。こんどこそしかえしをしてやろうとかんがえたくまは「よし」といつて畑をならした。そして「こんどはおれは土から下のものをとるぞ」ときにいつた。

日がたつて畑のものはすつかり大きくなつた。きつねが土から上のものをもつていつたあと、くまは大きなものがあるだろうと掘つてみると、小さな根ばかりだつたくまはおこつてきつねのあなをのぞいた。するときつねはたくさんのいちごを、うまそうにたべていた。「一つくれんか」とたのむと「やくそくだから、やれんよ」ときつねがいつたので、くまはおこつてぜつこうしてしまつた。

またいくにちかたつたある日、きつねは「くまどん、そうおこりなさんな。きようはつみほろぼしにいいことをおしえにきたんだが」と、くまをささやぶにさそいだした。「あすこをみなさい、あの大きなみつばちをあげようと思つたんだが、どうだい」

みつばちの大好物のくまは、のこのこおくへ入つた。ところがみつばちは大ぜいでくまにかかつてきた。くまはくるしがつて、もがきころがつた。そのうちにきつねは、みつをみなもつてにげてしまつた。またしてもだまされたくまは、みつをみなもつてにげてしまつた。

外作業と四時間のドイツ語講習後一カ月坑内見習期間を終え、実作業に従事することと思います。到着後二週間余の今日はや小旅行のプランも組まれ、大体チユーリツプのオランダへということです。それからわれわれの出発時にはじまつた春季闘争はよい結果は生れたのでしようか。だれ一人知らず不安に思つています。

【四山支部へ送られた手紙】

はや旅行の計画

第二陣から西独だより

◇…前略ごめん下さい。

春季闘争中にもかかわらず、われわれのためにお世話いただき、おかげ様で四山組三名は先月二十七日元気で安着いたしました。

当鉱には先輩の貝田さん、連絡員の高田さんはじめ皆様のご厚意でわれわれは何一つ心配することなく作業に、勉学に励むことができます。

大体、最初の六週間は四時間の坑こでうまがねているすきに、あとあしにくいつくことだ。するとうまはよはつてしまう。そのときのひけつだがね、お前のしつぽとうまのしつぽをくくりつけることを忘れてはだめだ」

それをきいたきつねは、よろこびいさんで広つぱにでかけていつた。くまのいうとおり、広つぱにはたくさんのうまがねころんでいた。その中からふとつたのをえらんで、きつねは、こつそりよりそうとじぶんのしつぽとうまのしつぽをかたくつなぎました。そしていやというほど、うまのあとあしにかみついた。かみつかれたうまはびつくりしてたちあがり、くるくるまわつてきつねをふりまわした。しつぽがかたくむすびつけてあつたので、きつねは目をまわししまいにはしつぽがぬけて、きつねは山の岩かどにたたきつけられてしまつた。

虫のいきになつてうんうんうなつているきつねのそばにやつてきたくまは「ざまあみやがれ」と笑つたそうだ。

長屋太郎記

中村かめお